

田村直臣のアメリカ体験と『日本の花嫁』

戸 田 徹 子

山梨県立女子短期大学 国際教養科

Naomi Tamura's American Experience and *The Japanese Bride*

Tetsuko TODA

Yamanashi Women's Junior College

Department of International Studies, Yamanashi Women's Junior College

In 1893, Rev. Naomi Tamura wrote a small English book on Japanese women and their family life, and published it in the United States. Although it was mainly for an American readership, *The Japanese Bride* unexpectedly provoked a serious incident in Japan. Japanese newspapers and journals found that Tamura's description of Japanese family was distorted and that his book would embarrass Japan's honor. The Imperial Rescript on Education was issued in 1890, and the new Japan just started penetrating the patriotism, loyalty and filial piety as its official ideological foundation of the nation. Japanese Christians were often regarded as subverters to this policy. Japanese Christians joined Tamura's critics, for they saw in his book an additional obstacle to the development of Christianity in Japan. The Japanese Synod finally decided to revoke Tamura's ordination and excommunicate him. With special reference to Tamura's American experience and the women's foreign missionary movement in the United States, this paper tries to investigate the historical context in which *The Japanese Bride* was written and to explain the intention that Tamura published this book.

Keywords : Naomi Tamura (田村直臣), *The Japanese Bride* (『日本の花嫁』), Protestant foreign mission (プロテスタント海外伝道), woman's work for woman (婦人伝道), Japanese family (日本の家族)

は じ め に

日本基督教会の牧師であった田村直臣（1858年－1934年）は1893年（明治26年）に *The Japanese Bride* と題された英文の本をアメリカで出版した。¹⁾ この本は邦語で『日本の花嫁』と呼ばれたが、その内容が日本の家族制度を侮辱しているとの理由から、田村は日本基督教会の第一東京中会から「同胞讒誣罪」で告発され、同教会大会において教職を剥奪された。内村鑑三不敬事件や「教育と宗教ノ衝突」論争と同時期に起きたがゆえ、この『日本の花嫁』事件は、国粹主義的反動期に日本人キリスト者たちが田村を処罰することによって国家との対立を回避し、自己を守ろうとしたため生じた事件だったと解釈されてきた。しかしながら『日本の花嫁』事件はかなり複雑な要因をもち、国家とキリスト教の対立という時代背景ばかりでなく、アメリカ帰りで独自の集金ルートをもつ田村への反発や、日本基督教会内部の派閥争い、さらに日本人キリスト者の家庭生活の実

体などが関係していたと考えられる。このような『日本の花嫁』事件の全体像を解明する第一段階として、本論では『日本の花嫁』の性格を明らかにする作業を試みたいと思う。まずはアメリカ人の異教の女性への関心がどのように醸成されていたのかについて簡単に述べ、次に田村の自伝に彼のアメリカ体験を追う。その上で『日本の花嫁』の内容に踏み込み、田村が当時のアメリカで盛んだった婦人外国伝道運動の興味に答える形で『日本の花嫁』を著した可能性を指摘していくことにする。

異教の女性への関心

南北戦争以降、アメリカ合衆国では婦人外国伝道運動が盛んになっていった。これは女性による、女性を対象とした海外伝道（woman's work for woman）を支援する活動であり、各教派に既存の外国伝道協会とは別個に女性が運営する婦人外国伝道協会が次々と設立された。これらの協会の会員たちは、海外伝道の鍵は女性たちにあると考え、

道徳的に腐敗した異教社会で虐げられている女性にキリスト教を広め、「キリスト教徒の母親」「クリスチャン・ホーム」を生み出すことによって、子どもたちに、そして配偶者に感化を及ぼし、キリスト教伝道を実現しようとした。²⁾

女性を核とする海外伝道という考え方はいわゆる「ビクトリアンの女性観」を敷衍したものであった。アメリカ史においてビクトリアンと呼ばれる時代は19世紀中期から末期をさす。信仰心と道徳性が女性の特質としてうたわれ、女性は家庭の擁護者、道徳の監視人、文明の担い手として位置づけられていた。しかし異教の女性たちの姿はこれとは正反対であった。1870年代以前にアメリカン・ボードおよび各派の外国伝道協会は異教地の文化や政治、家庭生活をいずれもキリスト教国である母国のそれとは対照的なものとして描きだしていた。もとより女性の地位もその例外ではなく、異教の女性たちの悲惨さもすでに報じられていたが、とくに南北戦争後の婦人外国伝道運動では、婦人伝道への関心を高め、緊急性を強調するために、異教の女性への虐待や迫害が大いに喧伝されることになった。女性の社会的地位はキリスト教を信仰しているかどうかによって決まると、婦人外国伝道の支援者たちは考えていた。彼女たちはキリスト教国の女性たちは尊敬され、「幸福な家庭の女王」として君臨していると理解し、これをキリスト教の恩恵と捉えた上で、この喜びを異教の女性たちと分かち合いたいと願ったのだった。すなわち女性の道徳的優位性、夫と同等の夫婦関係、家庭内における主導権を異教の女性も確保すべきだと思ったのである。その上で、自らが自国で担っているような役割を異教の女性たちにも期待したのであった。

端的に言うと、婦人外国伝道協会の活動は海外に婦人宣教師を派遣し、その伝道活動を財政的に支えることであった。これを実現するためには、婦人伝道への関心を喚起し、献金を確保しなければならない。巡回代理人 (traveling agents) や休暇で帰国中の宣教師たちも各地を回り、異教の女性の窮状を訴えて支援者を募ったが、なかでも大きな役割を果たしたのは各派婦人外国伝道協会の機関誌だった。1870年代以前の海外伝道関係の印刷物といえば宣教師の伝記や年次報告が中心であった。ところが婦人外国伝道が盛んになった1870

年代以降、機関誌が海外伝道の主たる情報源になっていった。女性たちは、*Life and Light for Women* (会衆派)、*Woman's Work for Woman* (長老派)、*The Helping Hand* (バプチスト派)、*Heathen Woman's Friend* (メソジスト派)、*Woman's Missionary Advocate* (南部メソジスト派) などの予約講読者となり、婦人伝道を継続的に支えた。これらの機関誌は通常月刊であり、国内での支援活動を盛り上げるために部会やバンドの組織化や運営方法、集会のもち方などを指導する一方で、諸外国における伝道活動を報告していた。なかでも婦人外国伝道協会の機関誌に特徴的だったのは、海外における布教の様子を一方的に伝えるばかりでなく、各伝道地の歴史や地理、生活習慣、女性の地位などの系統的な学習が求められ、後にこれが“the United Study of Missions”の形態をとるようになったことだった。すなわち婦人外国伝道運動において異国への関心、そして異教の女性への関心は積極的な学習が求められるまでに高められていたのであった。³⁾ 婦人外国伝道運動では仏教、ヒンズー教、イスラム教などのキリスト教以外の宗教はエスニック宗教と総称され、エスニック宗教が女性への迫害を正当化していることを糾弾したのであった。てん足や幼年結婚などの悪習や、教育の機会が女性に与えられていないことにも同情が集まったが、ことに異教の女性の家庭生活には強い関心が寄せられ、一夫多妻制や夫への服従、夫の家族との同居などの問題がたびたび取り上げられたのであった。⁴⁾

田村のアメリカ体験

田村は京橋教会の牧師職を辞し、1882年(明治15年)8月に渡米した。はじめオーバン神学校で3年間学び、ここを卒業するとプリンストン神学校に籍を置き、神学生はプリンストン大学で研究できる特権を利用して心理学を学び、プリンストン大学から修士号を得た。その後、約5カ月かけてヨーロッパ、アフリカ、インドと世界を回り、1886年(明治19年)12月に日本に戻った。アメリカに滞在したこの4年間に、田村はアメリカ社会と直に接し、アメリカの教会や家庭の事情に精通するようになった。田村の自叙伝、『信仰五十年史』(1924年)からは、田村が積極的に講

演活動をこなし、頻繁に旅行に出かけ、よく人々と交わり人脈を形成していった様子がうかがえる。⁵⁾ ところで田村が留学した 1880 年代のアメリカとはまさにビクトリアン期のアメリカであり、婦人外国伝道運動が盛り上がりを見せていた。はたして田村の目にビクトリアンのアメリカ女性たちの姿はいかに映じたのであろうか。そして婦人外国伝道運動のうねりを田村はどう受けとめていたのだろうか。

田村は十分な資金的裏付けも具体的な留学計画もないまま渡米したため、非常に心細い思いをしていた。だが日本での知人、宣教師のツルー夫人から紹介状をもらってシラキュース市のソーバー博士を訪ねたところ、彼は田村を暖かく迎えてくれたばかりでなく、オーバン神学校に進学する手筈を整えてくれていたのであった。オーバン神学校で田村は勉強のかたわら演説で収入を得ていた。それというのも当時アメリカでは日本人はまだ珍しく、日本について講演の依頼が絶えず、田村は引っ張りだこだったからである。最初の頃は無報酬で講演を引き受けていたが、後には講演料を要求するようになった。このところの事情を田村は次のように記している。

私が米国に居つた時代は、日本人は、米国人の目には珍らしく、非常に大事にされたものである。日本に関する演説の招待は、毎日の様に來た。学校で学ぶよりは、外に於て演説する時間の方が多様なに思つた。初めの中は、稽古の積で、無報酬で、演壇に立つたものであつたが。一年後には、幾何でなくては、演説には行かないと、米国式に化せられてしまつた。一週二回は必ず為たし。時とすると、四日も続けて、場所から場所へ、演説旅行を為たものであつた。⁶⁾

田村は講演料で金に不自由しなくなったばかりでなく、貯金もでき「学生の成金」になっていくのである。

田村はまずはアメリカ国内旅行に大金を使った。長い夏休みのほとんどを彼は旅行にあて、一年目はニューイングランド地方を、2 年目は北西部を旅し、3 年目はオーバン神学校卒業年にあたるため、卒業してアメリカ各地の教会に赴任した同級生たちを訪問した。プリンストンでの学業を終え

て、最後の夏休みには 2 カ月ほど南部を旅行している。これはプリンストン大学で南部出身の学生たちと知合ったのが縁で、南部各地の教会から招待状をもらったことによった。この時期、「南部長老教会外国伝道局」が日本伝道に着手したばかりで、田村の訪問は日本への関心を喚起するのに一役かったという。田村の計算によると、小旅行を別にしても、4 年の留学期間のうち 14 カ月間を旅行に費やしたことになる。本人もアメリカに勉強しに行ったのか旅行しに行ったのか分からないほどだったと回顧するのだが、旅行が貴重な体験であり、これを通して見聞を広め、さらにアメリカ社会に親しんでいった様子を、田村は次のように語っている。

私は神学校で学んだよりは、遙かに此の旅行に依つて利益を得た。米国の大人物にも接した。大学校も視察した。教会の事情も能く知つた。中流階級のホームに宿つた。友人も沢山作つた。米国南北の人民の差違も悟つた。非常な米国通にもなり、英語演説も大變上達し、金も出来、米国の景色にも接し、米人から大旅行家と呼ばれ、大いに得意であつた。⁷⁾

しかもこれらの旅費を田村は全て演説で得たお金でまかなったのだった。また田村はオーバン神学校では給費生として学んでいたが、経済的余裕も生まれたからであろうがプリンストン神学校へは自費で進学している。日本関係の演説でどれほどの収入を得たかは定かではないが、アメリカの国内旅行と学費を賄ってもまだ多額のお金が残った。そこで帰国を前にして、田村はこれを日本で土地と家屋を購入する費用にあてるか、それとも世界一周旅行の経費に充てるか悩んだ末、後者に決めている。⁸⁾ 田村の自伝からは、留学生たちに母国を紹介する講演依頼が殺到し、しかもそれがいい収入源になっていたことが分かる。さらに留学中に田村はある教会から、コンサートの余興として日本式の結婚式を演じるから見に来てほしいと招待された。見物に行ったところ、それは本物の日本の結婚式とは程遠いもので、様々な国の習俗が混じり合った、いわば「コスモポリタン」な結婚式だったので、あきれてしまったことがあった。⁹⁾ 講演依頼や「コスモポリタン」な結婚式は

田村が日本への関心の高まりを身近に感じた出来事であったろう。

それでは田村はアメリカ女性についてどう言っているだろうか。田村によれば、彼はアメリカに留学する以前の、1877年(明治10年)頃には、すでに「男女同権論を主張し、男女の關係に就いて、日本在来の習慣を根本的に破壊せんとする過激派」であったという。¹⁰⁾ しかしこれは自伝の回顧にすぎず、実際その通りであったかどうかは疑問が残る。もしそうであったとしても、その時点では宣教師たちの教えを頭で受け入れていたにすぎなかったかもしれない。実際のところ、田村はアメリカ女性と親しく交際する機会に恵まれていたようで、オーバン神学校時代に通っていた教会では女学生の友人が多かったことや、懇意にしていたアメリカ女性が2、3人いたことが自伝には記されている。またおばあさんと呼ばれるような世代の女性たちと出会い、親切にしてもらう場面も多かった。¹¹⁾ このような経験を通して、田村はアメリカ女性を身近で観察し、会話相手として男性に劣らないことを知り、自ずと女性を尊重する態度を身につけたと考えられる。帰国後の1889年(明治22年)に、田村はアメリカの男女交際の方法や結婚の有様を紹介する目的で、『米国の婦人』を著した。この本はある意味ではビクトリアン期のアメリカ女性の観察記にもなっているが、田村の視線は一貫して好意的である。そのなかで田村は「米国に生れた婦人は実に幸福です。米国は女あつての米国です」と断言する。とにかくアメリカの女性には「權威」があり、男性は女性に丁寧にあやまり、重い荷物があれば代わりに持ち、席を譲ってやる。アメリカは世界で一番女性を大切にしている国で、「女の極楽」「女国」だ。¹²⁾ なぜ女性がこれほどまで尊重されるのかというと、立派に家を治め家事をこなすばかりでなく、妻として夫を助け慰め、母として子供に道理をもって接し、よい感化を与えるからであると述べている。あくまで体験を通して田村はアメリカ女性の魅力を知り、家において家政と育児の重責を果たすがゆえ、「女国」「女の極楽」と思われるほど女性が大事にされる実情を知っていたのだった。

さらに田村はそのような女性の仕切るアメリカ流の家庭生活にも惹かれた。オーバン神学校に進学する道を拓いてくれた恩人であるソーバー博士

の家庭について、田村は「私が米国に来て、基督者ホームに始めて宿り、其のホームの有様を見て、日本のホームとの大いなる相違を知り、非常に驚き、日本に、基督者ホームを作りたいとの決心を起さしめた」と語っている。¹³⁾ 在日の宣教師たちの説くクリスチャン・ホームの姿を田村も聴き及んでいたはずだったが、それを実現せんという思いはアメリカの地を踏んで初めて切実なものになったのである。またそのような気持ちがあればこそ田村はアメリカの家庭生活をよく観察し、アメリカの家庭の内情に精通するようにもなったのであろう。そして日本に戻ると、田村はその決意を実行に移すことになる。

田村の女性への関心の高さは、帰国後、『米国の婦人』を書いたこと自体にも表れている。田村がこの本を出版した1889年頃はまだ欧化主義が盛んであった。そのような時代風潮のなかで女性の地位向上を説く者は日本キリスト教界のみならず、日本の政界、教育界にも多々いた。しかし田村において独自だったのは、4年に及ぶアメリカ体験を通して女性が尊重される理由に詳しく、そのような社会の有様が血となり肉となっていたことであり、さらにアメリカ流の夫婦関係と家庭生活を日本において自らが実践しようとしたことだった。田村はミッション・スクール出身のゑいを結婚相手に選んだ。さらに田村は結婚を前に、婚約者であったゑいをアメリカに送っている。ゑいの書いた『昔かたり』によれば、田村とゑいは1887年に結婚予定だったが、留学経験をもつ田村と結婚するにあたっては、ゑいもアメリカの学校生活を体験し、家庭の様子を見てきたほうが宜しかろうと、回りの人たちが留学の手筈を整えてくれ、旅費は田村が負担し、それが実現した。ゑいはニューヨーク州エルマイラ市にあるエルマイラ女子大学で2年間ほど学んだが、アメリカの家庭の実地見聞が重要な目的だったことは、後にその報告を「米国の各家々」にまとめたことから分かる。¹⁴⁾ 言うまでもなく、ゑいの留学は、アメリカ流の夫婦関係と家庭生活を日本において実現し、他の日本人キリスト者たちの模範たらしめた田村の願いの反映でもあった。

アメリカ滞在中、田村の生活は神学校と教会、そして旅行を中心に展開した。そしてこの間、田村は求めに応じて日本に関する講演をなすことで

収入を得ていたのである。19世紀の後半、教会の中心は女性であり、海外伝道はもはや男性の関心事ではなくなっていた。このことを考えると、田村が教会や日本講演で出会ったのは女性が多かったことは想像に難くない。そしてそのような場に来る中産階級の女性たちの姿と家庭生活を田村は受容したのであった。

『日本の花嫁』の出版

アメリカから帰国後、田村は数寄屋橋教会の牧師に再び着任した。その一方で、田村は1888年(明治21年)に貧しい境遇にありながらも向学心に燃える青年たちのための寄宿舎、「自営館」を設立した。田村は1892年(明治25年)に自営館拡張の資金を集めるために再渡米し、一年間ほどアメリカに滞在した。田村が『日本の花嫁』の出版準備をしたのはこの期間であった。原稿が完成したのは1892年の暮れ頃で、これを2、3の大手出版社に送付してみたが、みな出版を拒否されてしまった。ハーパー社も日本関係の本はすでに多数出回っているからという理由で、一度は出版を断ってきた。しかし仲介の労をとってくれる人があって、出版にこぎつけたのだった。¹⁵⁾ 著者である田村も校閲者であるC. H. フィリップスも収益は全て自営館に寄付する出版契約になっていたことから明らかなように、¹⁶⁾ 実際のところ『日本の花嫁』の出版は先に述べた自営館拡張資金獲得運動の一環だったと考えられる。田村によれば、自営館とは「苦学生に職業を與え、基督者ホームで、学生を基督化する」ための場であった。¹⁷⁾ だとすれば、いかなる人々が自営館のような異国の伝道事業に興味を示し、異教の日本女性の地位や家庭生活に関心をもってくれるかが問題となる。田村が想定していた支持者や読者は、おそらく留学中に彼を講演者に呼んだり、彼を自宅に招待し親切にもてなしてくれた人々、すなわち教会関係者や外国伝道後援者であったろう。そしてなかでも有望だったのは、当時盛んであった婦人外国伝道の後援者たちではなかったろうか。ここで『日本の花嫁』の読者層に焦点を絞ると、すでに「異教の女性への関心」で検討したように、婦人外国伝道の後援者たちは異教の女性たちの家庭生活や家庭内の地位に非常な関心を寄せていた。資金獲

得のための出版物であれば、まずは売れることを考慮しなければならず、彼女たちの存在を視界に入れて田村が『日本の花嫁』を書いた可能性は否定できない。

このような観点から『日本の花嫁』の内容を分析するにあたって、まずはこの本と『米国の婦人』との関係を吟味しておきたい。¹⁸⁾ 『米国の婦人』において、田村は「日本と米国との婦人の地位の相違を論じ、私の持論なる男女同権論を主張し、日本の風俗習慣を破壊し、新日本に於て、新ホームを作るの必要を高調し、基督教でなくては、男女の貞潔を守る事も出来ず、婦人の地位を高める事の出来ない事も極論した」という。¹⁹⁾ このような田村の回顧にもかかわらず、『米国の婦人』の論調はかなり軽いものであり、アメリカではキリスト教がバックボーンであるからこそ女性の地位が高く、健全な男女交際が行なわれ、うるわしい家庭が実現できることは繰り返し強調されているものの、この本はむしろアメリカの女性や男女交際、夫婦関係、家庭生活について知識を得られる本として、とくに男性には男女交際のエチケットを知ることができる点で有益な本であるとしきれない程度である。さらに田村は『日本の花嫁』の出版経緯について、『米国の婦人』の材料を、其の僉用い『日本の花嫁』と改題して、英文を以て、米国ハアパー・ブラザル社から出版した」と述べている。²⁰⁾ 田村の留学中の面白おかしいエピソードなど、内容的に明らかに重複している箇所があることは確かである。²¹⁾ さらに『米国の婦人』も『日本の花嫁』も日米の女性や家庭生活を比較しながら論を展開しているので、これらの点から田村は同じ材料を使って書いたと言っているのだろうが、日本人読者にアメリカの女性の社会的地位、男女交際の方法、夫婦関係、家庭生活を解説した『米国の婦人』と、アメリカ人読者に日本の家庭生活の内幕を紹介した『日本の花嫁』とで、その内容が同じだということは到底ありえない。それゆえユーモアたっぷりの語り口やキリスト教による日本の家庭生活の刷新を願う心持ちは一致しているものの、田村の自伝における言及を根拠に『米国の婦人』と『日本の花嫁』を同一視はできないのである。

『日本の花嫁』は大きさが縦14センチ×横9センチ程度の百ページに満たない小型本で、目次

は以下のようになっている。

- I. Why Do We Marry?
- II. Courting
- III. The Go-Between
- IV. Preparation for the Wedding
- V. The Wedding Ceremony
- VI. The Honey-Moon
- VII. Bride and Bridegroom at Home
- VIII. Mother and Grandmother

一見して分かる通り第2章から第6章までは日本の婚姻習俗の解説であり、多少なりとも日本の家庭生活の内情に触れてくるのが第1、7、8章である。田村は以下のことを順次述べていく。日本人の結婚は恋愛に基づくものではなく、その目的は家系を絶やさないことにある。女性は幼い頃から男性より劣ることを教え込まれ、若い男女の間には壁がある。男女交際の機会はなく、結婚は見合いによる。結婚に際しては仲人が重要な役割を果たす。女性は結婚を機に外見的に大きな変化を遂げる。日本にはハネムーンは存在せず、夫婦が人前で愛情を示すことなどない。若夫婦は夫の両親と同居するのが一般的で、これが日本の家庭生活に致命的打撃を与えている。世代の違う者が不和に陥らずに家を共に治めるのは困難であり、とりわけ嫁姑の問題は大きい。女性の妻としての地位は男子が誕生して初めて安定するが、子どもたちは全て父親のものともみなされる。嫁ぐときに持参したお金は夫のものになり、夫が亡くなった場合は長男に財産が相続されるので、女性は結婚後に財産を所有しない。家にあっては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うという三従の教えが示すごとく、女性には常に従順であることが要求される。このような辛い生涯で女性は唯一ご隠居さまになってから、自由で気楽な生活を送ることができるようになる。

あえて要約すると以上のようにまとめられるわけであるが、これは事細かな日本の風俗の説明部分を全て省いた上のことである。実際のところ、この本では女性の化粧や衣裳、子供をめぐる風俗習慣、とりわけ結婚をめぐる習俗に紙面の大部分が割かれている。例えば、お見合いの種類、既婚女性のお歯黒や眉剃りの習慣、結婚衣裳が白無垢

である理由、結婚式の祝い膳には蛤の汁が付きものであることなど、外国人には珍しく思える習俗が紹介されていく。そして全体を通してみると、このような日本の習慣の解説も『日本の花嫁』では重要な要素をなしていると考えられる。しかしながらトピックの取捨については、太田雄三氏が指摘するように、すでに廃れてしまった習慣が現在でも生きているかのように描くなど、「外国人の目にエキゾチックに映るものへの片寄り」あるいは「外国人読者へのこび」²²⁾ともいえるものを感じられるのである。

ところで『日本の花嫁』にはもう一つの顔がある。それは日本の家族制度や女性の隷属的地位を告発した本としての評価である。少なくとも田村と同時代の日本のキリスト者たちの多くがそのように考えていたからこそ、日本のキリスト教界に『日本の花嫁』事件は起こったのだった。また研究分野では、武田清子氏などが日本の家族主義的道徳を批判した書として『日本の花嫁』に高い評価を与えている。²³⁾ しかしながら分量からいうと、田村が本書において日本の家族制度を批判している部分は限られている。この本の構成をみると、第1章で日本では家の維持が結婚の目的とされていることと、終章で女性には結婚後の財産所有が許されないことが指摘される以外、田村が日本の家族制度をまとめた形で批判しているのは第7章の“Bride and Bridegroom at Home”に集中している。この章では、夫婦が独立世帯を形成していない場合、すなわち親夫婦と同居している場合の問題点と、夫婦の不平等な関係が取り上げられている。前者については、同居では家内にとくに嫁姑の間に不和が生じること以外に、隠居制度が重要な問題として指摘される。日本では親は50歳を過ぎると家督を息子に譲り隠居する。親たちは生活を支える必要から解放され、自由で気楽な生活を送るようになる。息子たちは習慣だから仕方がないと、義務感からいやいや親の世話をする。この隠居制度への批判は、他の部分と比較するとやや声高である。夫婦の不平等な関係では、全く自由でやりたい放題の専制君主な夫と、そのような夫にかしづき耐えている従順な妻という、なかば紋切型の夫婦関係が紹介される。そして日本では夫婦の関係はもろく簡単に離婚に至るが、その離婚理由としては女大学に言う7つの理由に

加えて、夫が妻を嫌っている場合や姑が嫁を気に入らない場合など、いずれもかなり一方的な理由がまかり通っていることが述べられる。田村は『日本の花嫁』の序文において、これまで外国人の目に触れることのなかった日本人の家庭生活の裏面（“the dark side of our home life”）をも含めて紹介していくと語っていた。²⁴⁾これに直接的に呼応する箇所は外ならぬ第7章の“Bride and Bridegroom at Home”であろうが、この章ですら田村の論は鋭さを欠き、妻の日常生活、仏壇やお墓参りなどの日本の風俗紹介に脱線しながら、日本の家庭生活の「裏面」を報じるのである。また日本の女性は手に職がなく自活の手段を持たないので、いきおい結婚に依存し、男を甘やかす結果、夫が暴君になってしまう等の指摘はなされるものの、それが女性の教育や財産、職業の問題にまでは発展しない。ところで『日本の花嫁』出版の2年ほど前に、同様に日本の女性や家庭生活を紹介した本がアメリカで発行された。この本は滞日経験をもつアメリカ女性、アリス・ベーコンが著した *Japanese Girls and Women* (1891)²⁵⁾である。家庭を改革しないと日本は文明国の仲間入りはできないとの立場に基づき、ベーコンは田村と同様に日本の生活習慣を紹介しながら、日本の家族制度に批判を加えていく。このアリス・ベーコンの批判が教育制度や法的権利の保障、女性の自立などの議論に及ぶのに対し、田村の著述はいかにも深みに欠ける。さらに第7章以外では、日本人の道徳は形式的なものだ、日本人は未だに夫婦間の真の愛情を知らない、日本人の親は娘の将来の幸福を考えずに嫁にやる等の、かなり誇張された表現が見受けられる。そしてこのように単純化された日本人批判が、後に反発を招くことになるのである。議論の浅さや誇張表現は紙幅の都合から生じたのかもしれないが、いずれにせよ『日本の花嫁』においては日本の家族制度を直接に非難した箇所ですら、型通りで、通り一ぺんな印象が残る。

田村は『日本の花嫁』の執筆動機を、「私は飽迄も基督教の立場から、この書を著述したのである。当時、日本主義に気触れて居る人々に応戦を試みたのである」²⁶⁾と述べている。しかしながら田村のこの言葉を我々は文字通りに受け取ることにはできない。アメリカ人向けに英文で日本の家庭

生活を批判する本を出版することが、なぜ日本主義に傾倒していく人たちへの挑戦になりうるのか。どうしてそのような人たちを対象にして直接、日本の家庭生活を非難する論陣を張るなり、対照して語っていたアメリカの家庭生活の利点を再び積極的に主張するなりしなかったのか当然の疑問が残るからである。さらに言えば、この本は日本の家族制度を批判する書としては中途半端であり、議論が深められていない。田村の執筆理由の説明は、この本が『日本の花嫁』事件に発展した後の、言い訳（積極的意義付け）にすぎないと思われる。

それでは『日本の花嫁』の中途半端さはいったい何に由来するのだろうか。前述した通り、『日本の花嫁』の執筆は自営館拡大資金獲得運動の一環として位置付けられるべきで、その限りにおいて売れることも肝心であり、この小さな本がいささか通俗的な内容になったとしても、読み易さが優先したのだった。おそらく『日本の花嫁』では日本の婚姻と家庭生活をめぐるエキゾチックな習俗の紹介も大きな要素であり、理屈っぽくならない程度の日本の家族制度批判と、そここちにちりばめられたアメリカの家庭生活賛美の、これら三者の調和がこの本の特徴になっている。田村は4年にわたるアメリカ滞在経験を経て、とりわけ日本に関する講演経験を踏まえて、アメリカ人の異国への関心や日本への関心の所在に熟知していたはずである。²⁷⁾そして女性関係の文献を著すにあたっては、アメリカの地で日本式結婚式の余興があったことから分かるように、アメリカ人読者たちの好奇心が婚姻習俗や家庭生活の細部にまで達しているのに気付いていたのだろう。『日本の花嫁』はこのような好奇心に答える役割を果たしたと考えられる。また田村はクリスチャン・ホームの実現を願う実践家ではあっても、女性の地位や家族制度を本格的に論じるような理論家ではなく、もともとしかつめらしい著述を好まない人であったことを考えれば、²⁸⁾意図せずしてこのような形態の本に落ち着いたのかもしれない。いずれにせよ、『日本の花嫁』は女性が尊重されない男女関係、恋愛に基づかない結婚、近代的な核家族以外の家族形態、女性が家庭の女王でない状態を描きだすことによって、日本女性に対する同情を呼び起こしたと同時に、アメリカの読者たちに自国の家庭生活への確信を深めさせたであろう。そ

の反面、あまりに単純化された批判に、日本人の反発は大きくなっていくのである。

日本キリスト教界の反応

『アワ・デイ』(Our Day) に掲載されたジョゼフ・クック夫人による紹介文を批判的に引用する形で、英字新聞、『ジャパン・ウィークリー・メール』(The Japan Weekly Mail) 紙は1893年(明治26年)7月22日に『日本の花嫁』のことを初めて日本に報じた。同紙はまずクック夫人が日本は一夫多妻の国で、妾が法的にも認められているような誤解をしている点で、書評者として不適当であると指摘した上で、田村について、外国語で短所を告発されても日本人の非は改まらないだろうに、なにが目的で日本人を非難する書を外国人向けに出版したのかと批判したのだった。この記事を転載して、『万朝報』と『女学雑誌』も非難の声をあげた。これらに続きキリスト教界内では『福音新報』と『基督教新聞』、それ以外に一般や仏教系の新聞雑誌も『日本の花嫁』を論評し、批判を加えていった。²⁹⁾『日本の花嫁』には事実でないことが書かれている、文の調子が軽薄である、日本の後進性をことのほか強調し、家庭生活の内幕を外国に暴露し国の名誉を傷つけたというのが主な批判点だった。これを金を得る手段としていることに対しても反発は強かったが、なかでも日本キリスト教界内部では『日本の花嫁』がキリスト教への悪感情を助長していることが危惧されたのだった。

時代はまさに欧化主義への反動期であり、日本人キリスト者たちの国家への忠誠心が疑われていた時だった。『日本の花嫁』は一般の人たちの耳目を集める事件に発展していった。『読売新聞』は「自国を譏り同胞を辱め外人の好奇心に乗じて奇利をはくせん」とした田村の処遇は、日本のキリスト者にとって「試験石」になると報じた。日本人キリスト者や牧師はどんな思想をもっているのか、田村のような極端な場合は例外としても、「尊外卑内の精神」を有しているか否かは国家にとって由々しき問題である。そればかりでなく日本人キリスト者にも大きな意味をもつと、以下のごとく述べるのである。

基督教徒は不幸にして時に不敬の風聞を蒙り又は勅語に反対するの嫌疑を受く、而して教徒の弁白に依れば、風聞は風聞にして嫌疑は嫌疑が如く、余輩も其の或は然るべきを信ずと雖も、此風聞又は嫌疑が同教徒に多きを見れば、多数の教徒中自ら招く者なしと謂いか難し。

田村事件は日本基督教徒の試験石なり、余輩は全国一班の教徒が如何に之に対して措置するやを見て聊か其の冤を雪ぐや否やを知らんと欲す。³⁰⁾

このような一般の人たちの関心に日本人キリスト者たちも敏感であった。大和総合基督青年会は「基督教を以て非忠非君愛国となす悪感情及誤解の何となく全国に伝播せること」を指摘し、日本人キリスト者たちはキリスト教の信仰を明弁し、「陛下及吾国家に対する赤心を示して以て同胞を安堵せしめざる可らざる」ときなのに、よりによってこの時期に田村の事件がキリスト教に好意的でない人たちに格好の攻撃材料を与えたことを嘆いた。その上で、日本人キリスト者たちは決して『日本の花嫁』事件を黙視すべきではなく、調査委員会を設け適正な処置をなすべきことを提案したのだった。³¹⁾

日本キリスト教界内部では「日本花嫁事件有志会」が結成され田村攻撃の先鋒となり、植村正久を主筆とする『福音新報』が批判の場となった。1893年(明治26年)10月に田村は所属する日本基督教会の第一東京中会から同胞讒誣罪を宣告されたが、その告訴状には、「本書記述ノ体裁軽佻浮薄ニシテ虚実ヲ混淆シ妄リニ日本人民ノ恥辱トナルベキ事ヲ記載シタリ是則チ同胞ヲ讒誣シタルモノニシテ日本基督教会教師ノ職ヲ汚シタルモノトス」³²⁾と述べられている。この中会は日本ならびにアメリカの主要新聞に正誤文を掲載することを田村に要求した。田村はこの判決を不服とし、日本基督教会大会に上告した。翌年7月に開催された第9回日本基督教会大会は中会の事実認定を支持したものの、讒誣罪としたのは不適当であり、田村は「同胞を海外に侮辱し叨りに本邦人の名誉を毀損し教師の職に在る者の為すまじき行為をなし且日本伝道上にも容易ならざる障害を与え」たばかりでなく、これを反省せず逆に弁護しようとしている。これは牧師の職にある者にふさわしい行為ではなく、正誤文の掲載では不十分と判断し、

牧師職の剥奪を決定したのであった。³³⁾

お わ り に

『日本の花嫁』事件で田村攻撃の指導的役割を果たした植村正久は、この本を「実に馬鹿々々しき書物」だと言い、「其の実価より之を言へば、新聞雑誌の余白を慎むべきものに非ず。堂々たる中会の会議を煩はすが如きは、殆ど牛刀を以て鶏を割くの類なりと謂はざる可らず」と述べている。³⁴⁾ 実際のところ『日本の花嫁』は、外国人読者を意識して日本の家庭生活のエキゾチックな部分を強調しすぎているし、小冊子のゆえか日本の家族制度の批判は型通りでインパクトに欠け、深化もみられない。我々日本人の目からすると、この本は確かに内容的には取るに足りない本であるように思われる。しかしながら この本を好意的に受けとめる人たちもいたのであった。例えば、先に名前のあがったジョゼフ・クック夫人がそうである。彼女は日本に詳しく、『日本の花嫁』の書評では、サー・エドウィン・アーノルドやアリス・M・ベーコンの著作に言及し、新島謙の日本批判の言葉を引用していた。書評において、田村の経歴を記す際、クック夫人は田村とクリスチャン・ホームの関係を強調し、婚約者をアメリカに送りクリスチャン・ホームの有様を実地見聞させ、現在日本で2人の家庭はクリスチャン・ホームの生きたモデルとなっていると紹介しているのである。ジョゼフ・クック夫人についての詳細は不明だが、海外伝道に貢献した28名の女性たちを紹介した本、*Eminent Missionary Women* (1898) に挨拶文を寄せているところから、彼女は婦人外国伝道の有力な支持者だったと考えられる。³⁵⁾ おそらく田村はクック夫人のような人たち——クリスチャン・ホームの信奉者で、日本に関心があり、日本女性の地位向上を願っている人たち——を読者に想定し、読み易さにも配慮した上で、『日本の花嫁』を著したのであろう。それゆえ田村を批判する人たちがこの本を日本を誹謗する書物と捉え、「外人の笑柄に供するもの」と怒りをあらわにしたのに対し、田村は、笑い者にされどころか、逆に日本女性への同情が深まり、日本伝道への関心がさらに高まることを期待していたのであった。さらに本論の「日本

キリスト教界の反応」ではごく短く『日本の花嫁』事件の結果のみを記したが、植村が言うところの「実に馬鹿々々しき書物」に対して日本人キリスト者たちが過剰反応を示した理由については稿を改めて論じるつもりである。

註

- 1) Naomi Tamura, *The Japanese Bride* (New York: Harper and Brothers, 1893).
- 2) アメリカの婦人外国伝道運動については、拙稿、「アメリカにおける婦人外国伝道協会の成立」『アメリカ史研究』10 (1987)、40 - 55から要約。
- 3) Patricia R. Hill, *The World Their Household* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1985), 64, 87-88, 143-44.
- 4) Mrs. Moses Smith, *Woman Under the Ethnic Religions* (Chicago: Woman's Board of Missions of the Interior, 1898).
- 5) 田村直臣、『信仰五十年史』(警醒社書店、1924)、とくに第7章の「海外にあること四箇年半」を参照。
- 6) 同前、121。以下『信仰五十年史』からの引用では漢字の旧字体は新字体に改めて表示した。
- 7) 同前、126。
- 8) 同前、126、136、165。日本講演によって何千ドルものお金を作ったとの記述がある。また世界一周旅行をしてもなお残金がかかなりあったようで、そこから数寄屋橋教会建築に際しては500円もの寄付をしている。
- 9) *The Japanese Bride*, 43 - 46.
- 10) 『信仰五十年史』、171。
- 11) 同前、137、171。田村直臣、『米国の婦人』(秀英舎、1889)、150 - 52。
- 12) 『米国の婦人』、16、25、31。
- 13) 『信仰五十年史』、118。
- 14) 田村直臣の『昔かたり』は、日本キリスト教団巢鴨教会、『築地バンドの研究』(1986)、25 - 76に収録のものを使用した。留学の経緯については41 - 42、「米国の各家々」は58 - 71。
- 15) 『日本の花嫁』事件関係資料(新聞雑誌等の記事や日本基督教会の議事録)は、杉井六郎校注、「小沢三郎編日本プロテスタント史史料(6)~(9)——田村直臣の『日本の花嫁』事件(1)

- ～(4) —」『キリスト教社会問題研究』25 (1976)、26 (1977)、27 (1978)、29 (1981) に収録されている。本論ではこれを用いた。以下、ここからの史料については、原史料の名称等と、収録先である『キリスト教社会問題研究』の号数と頁数のみを示す。影山鍋吉、田川大吉郎、「日本之花嫁の著者田村氏を訪問ふ」『福音新報』132 (明治26. 9. 22) : 『キリスト教社会問題研究』26 (1977)、195。草稿はこれよりずっと先に用意してあったらしく、唐沢造酒は1892年7月3日に田村の自宅を訪ねたとき、『日本の花嫁』のタイプ原稿をプルーフリードしたことを語っている。唐沢造酒、「田村氏の言につきて」(寄書)『福音新報』136 (明治26. 10. 20) : 『キリスト教社会問題研究』26 (1977)、221。
- 16) 同前、「日本之花嫁の著者田村氏を訪問ふ」。「第一中会と田村直臣氏」(教報)『福音新報』135 (明治26. 10. 13) : 『キリスト教社会問題研究』26 (1977)、215。『日本の花嫁』の序文(v)に紹介されているが、組合派(会衆派)牧師C. H. Phillipsは田村の友人でオーバン神学校の同級生だった。
- 17) 『信仰五十年史』、168。
- 18) 武田清子氏や太田雄三氏などによる先行研究は、いずれも田村の自伝に基づき『米国の婦人』の材料をそのまま用いて『日本の花嫁』を書いたことを前提に、その時代背景の相違を強調している。武田清子、「田村直臣に見る家族主義道德の批判 — 『日本の花嫁』事件をめぐる — 」『人間観の相剋』(弘文堂、1959)、281 - 297。太田雄三、『『日本の花嫁』事件と内村鑑三』『内村鑑三』(研究社、1978)、77 - 116。
- 19) 『信仰五十年史』、208。
- 20) 同前、209。なお田村は東京第一中会では『米国の婦人』からの転用は3分の2程度だったと証言している。『明治二十七年七月 日本基督教会 第九回大会記録』中の「東京第一中会記録抄録」: 『キリスト教社会問題研究』27 (1978)、202。
- 21) アメリカ女性が仙台袴を試してみたところから女性のスカート着用の仕方が判明した話、鉄道の乗り換え駅で女性が未婚なのか既婚なのか見破るのに苦労した話、婚約者同志の会話を盗み聴きた日本人の話、ケンタッキー州のマンモスケーヴで黒人の案内者から婚姻年数を当てる方法を伝授された話などである。
- 22) 太田、『『日本の花嫁』事件と内村鑑三』、86。
- 23) 武田、「田村直臣に見る家族主義道德の批判」。
- 24) *The Japanese Bride*, v.
- 25) Alice Mabel Bacon, *Japanese Girls and Women* (Boston and New York : Houghton, Mifflin and Company, 1891)。
- 26) 『信仰五十年史』、211。
- 27) 「再び田村直臣氏の著書に付きて」(社説)『福音新報』130 (明治26. 9. 8) : 『キリスト教社会問題研究』25 (1976)、243に、「田村直臣氏の曾つて米国に在るや屢日本の事を演説せられたり。彼の国に遊べる人々にして其の演説のために米人の前に赤面せしもの少からず」と述べられており、田村の日本講演の質が問われることになる。『米国の婦人』にしても『日本の花嫁』にしても「軽薄」「落語家的」と批判されてもしかたない側面もあり、田村の日本講演がかなり通俗的なものだった可能性は否定できない。
- 28) 『米国の婦人』、序文の1 - 2。
- 29) “The Japanese Bride” (Editorial Notes), *The Japan Weekly Mail*, Vol. 20, No. 4 (明治26. 7. 22) : 『キリスト教社会問題研究』25 (1976)、221 - 24。
- 30) 「基督教徒と『日本の花嫁』」『読売新聞』、5806 (明治26. 9. 19) : 『キリスト教社会問題研究』25 (1976)、247 - 48。
- 31) 「日本の花嫁事件に就きて日本全国の基督教徒諸君に告ぐ」(寄書)『基督教新聞』532 (明治26. 10. 6) : 『キリスト教社会問題研究』26 (1977)、211 - 13。
- 32) 『明治二十七年七月 日本基督教会 第九回大会記録』中の「東京第一中会記録抄録」: 『キリスト教社会問題研究』27 (1978)、198。
- 33) 「日本基督教会議事摘要」『福音新報』175 (明治27. 7. 20) : 『キリスト教社会問題研究』27 (1978)、190 - 91。『明治二十七年七月 日本基督教会 第九回大会記録』: 『キリスト教社会問題研究』27 (1978)、221 - 25。
- 34) M・U (植村正久)、「第一中会の決議」(社説)『福音新報』135 (明治26. 10. 13) : 『キリスト教社会問題研究』26 (1977)、213。

- 35) “The Japanese Bride” (Editorial Notes) :
『キリスト教社会問題研究』25 (1976)、221 –
22。Annie Ryder Gracey, *Eminent Missionary
Women* (New York : Eaton and Mains, 1898),
ix. なおジョセフ・クックの名前は『信仰五十
年史』(85)に見受けられる。

(1997年1月13日受理)

